

知的障害者施設「しろうぶ学園」などを運営する社会福祉法人「太陽会」（鹿児島市）は、1973年の創立から50年たつ。利用者が生み出す絵やクラフト（工芸）作品などの芸術性が高く評価され、カフェやギャラリーのある園内には大勢の人が訪れる。40年間運営に携わってきた福森伸統施設長（64）は「強みを伸ばすケアがその人を輝かせる」と語る。会の歩みや運営理念を聞いた。

（小手川美子）

しろうぶ学園50年

太陽会は現在、自立支援、文化創造、地域交流の3事業を柱とする。「支え合う、創り出す、繋がり合う」という三つの活動が、少しずつ重なる暮らしの創造を目指す。

交流に大きく貢献しているのが、園内にあるカフェやギャラリー、交流スペース。2006年、建て替え期に来ていた入所施設の大改装に踏み出し、敷地内に相次いで開いてきた。

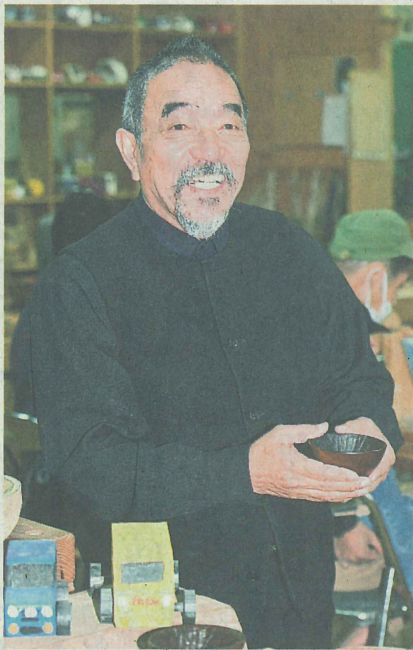
「人が訪れる魅力をつくり、施設を社会に開けば自然な交流も生まれる」。19年には近くに放課後デイサービスやホールがある「アムアの森をオープンした。福祉事業と地域の文化活動支援を組み合わせた場だ。

福森伸統施設長に聞く

会は、福森さんの両親である初代理事長の故・操さんと現理事長悦子さん（95）が始めた。障害児の養育状況を憂えて、よりよい環境づくりを目指した。創生期は生活指導と、大島紬や竹細工などの作業指導が中心。下請けもしていた。

■創造活動へ

当初は利用者の技術向上に懸命な時期があった。し



「利用者のものづくりには素朴で純粋な創造性がある」と語る福森伸統施設長

鹿児島市吉野町のしろうぶ学園（北村茂之撮影）

強みを伸ばすケア重視

施設を社会に開く



利用者自ら材料や作り方を選んで手がけた作品が並ぶ布の工房

まで彫り、刺しゅうは下絵通りの真つすくには縫わない人も。製品にならないことがたびたびあった一方、その味わいや無心に取り組む姿には「心が動かされるエネルギーがあった」。だが、それが決めた基準に合わせるのが、彼らの幸せにつながるのか。葛藤しながら独自の道を探り、下請けをやる。自分たちで考えて創り出す側」に転換した。

■ありのまま

90年代半ばからは積極的

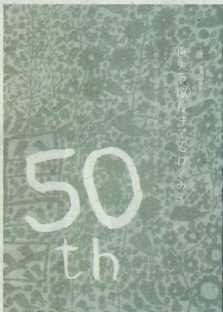
福祉では一般的に、当事者にとって不自由なところを補うケア（介助・支援）が重視される。「強みを伸

半世紀の歩み紹介

太陽会は、しろうぶ学園の創立50周年記念誌「両手を180度まで広げてみ

る」Ⅱ写真Ⅱを発行した。創立時から半世紀の施設の様子、利用者の作品を豊富な写真で紹介する。タイト

ラムから、「考えの枠の幅を広げれば、大抵の人について理解できるようになる」という意味がある。交流がある県内外の16人が、寄稿した。ファッショ



ばすケアが、われわれの特色。強みを磨き上げることによって生きる輝きが出てくる」。それがたまたま芸術として評価された、と受け止める。

会は入所施設のほか、グループホームやデイサービス、就労支援事業所などを運営。約440人が利用する。職員は約120人。工房やデザイン室のスタッフなど表現活動を支えるのは全体の1割ほど。大部分は暮らしのケアに従事する。どの業務でも「本人らしく」を支援の基本に据える。それぞれの人間性に目を向け、ありのままを肯定する。その人らしく生きることこそが「自立」。より自分らしさに近づくことを手伝うことが自立支援」と語る。

ンブランド「ミナペルホネン」デザイナー皆川明さんや、デザイン活動家ナガオカケンメイさんから多彩な顔ぶれが目を引く。福森さんは「施設利用者の活動による出会いのおかげ」と話す。カラーB5判154頁。3300円。オンラインショップで購入可能。同会099(243)6639。